

善知鳥

鳥頭とも書く

世阿弥作

前

ワキ

旅僧

シテ

老翁

後

ツレ

（母） 猿師の妻

子方

（謡なし）

其子千代童

ワキ

前に同じ

シテ

猿師の靈

地は

前は越中

地は

後は陸奥

季は

四月

「是は諸国一見の僧にて候。我いまだ陸奥卒土の浜を見ず候ふ程に。此度思ひ立ち卒土の浜一見と志して候。又よきついでにて候ふ程に。立山禪定申さばやと存じ候。急ぎ候ふ程に。是は早立山に着きて候。心静かに一見せばやと思ひ候。さても我此立山に来て見れば。まのあたりなる地獄の有様。見ても恐れぬ人の心は。鬼神より猶恐ろしや。山路に分つ街の数。多くは悪趣の嶮路ぞと。涙もさは下りけれ。く。

シテ詞
「なふくあれなる御僧に申すべき事の候。

ワキ
「何事にて候ふぞ。

シテ
「陸奥へ御下り候はゞ言伝申し候ふべし。卒土の浜にては猟師にて候ふ者の。去年の秋身まかりて候。其妻や子の宿を御尋ね候ひて。それに候ふ簑笠手向けてくれよと仰せ候へ。

「是は思ひもよらぬ事を承り候ふ物かな。届け申すべき事はやすき程の御事にて候ふさりながら。上の空に申してはやはか御承引候ふべき。

シテ「實にたしかなるしるしなくてはかひあるまじ。や。

思ひ出でたり有りし世の。今はの時まで此尉が。

木曽の麻衣の袖を解きて。

地「是をしるしにと。涙を添へて旅衣。く。立ち別

れ行く其跡は。雲や煙の立山の。木の芽も萌ゆる

遥々と。客僧は奥へ下れば。亡者は泣くく見送りて。行く方知らずなりにけり。く。(中入)

ツレ母「實にや本よりも定めなき世の習ひぞと。思ひながらも夢の世の。あだに契りし恩愛の。別れの跡の忘れ形見。それさへ深き悲しひの。母が思ひを如何にせん。

ワキ詞「如何に此屋の内へ案内申し候はん。

ツレ詞「誰にて渡り候ふぞ。

「是は諸国一見の僧にて候ふが。立山禪定申し候ふ所に。其様すさましき老人の有りしが。陸奥へ下らば言伝すべし。卒土の浜にては猟師にて候ふ者の。去年の秋身まかりて候。其妻子の宿を尋ねて。

それに候ふ蓑笠手向けてくれよと仰せ候ふ程に。上の空に申してはやはか御承引候ふべきと申して候へば。其時めされたる麻衣の袖を解きて賜はりて候ふ程に。是まで持ちて参りて候。若し思し召し合はする事の候ふか。

「是は夢かやあさましや。四手の田長のなき人の。

上聞きあへぬ涙かな。

「さりながら余りに心もとなき御事なれば。いざや

形見を蓑代衣。まどほに織れる藤袴。

「頃も久しき形見ながら。

「今取り出だし。

「よく見れば。

地「疑ひも。夏立つ今日の薄衣。／＼。一重なれども

合はすれば。袖ありけるぞ。あらなつかしの形見
や。やがて其まゝ弔ひの。御法を重ね数々の。中
に亡者の望むなる。蓑笠をこそ手向けられ。／＼。

ワキ「南無幽靈出離生死頓証菩提。

後ジテ

「陸奥の卒土の浜なる呼子鳥。鳴くなる声はうとふ
やすかた。一見卒都婆永離三惡道。此文の如くは。
たとひ押し申したりとも。長く三惡道をば遁るべ
し。如何にいはんや此身の為め。造立供養に預か
らんをや。たとひ紅蓮大紅蓮なりとも。名号智火
には消えぬべし。焦熱大焦熱なりとも。法水には
勝たじ。さりながら此身は重き罪科の。心はいつ
かやすかたの。鳥獸を殺しゝ。

地「衆罪如草露恵日の日に。照らし給へ御僧。

地「所は陸奥の。／＼。奥に海ある松原の。下枝に交
じる汐蘆の。末引きしをる浦里の。籬が島の笞屋

形。囲ふとすれどまばらにて。月の為めには卒土の浜。心ありける住居かな。く。

「あれはとも言はゞ形や消えなんと。親子手に手を取り組みて。泣くばかりなる有様かな。

シテ「あはれや實にいにしへは。さしも契りし妻や子も。

今はうとふの音に泣きて。やすかたの鳥の安からずや。何しに殺しけん。我子のいとほしき如くにこそ。鳥獸も思ふらめと。千代童が髪をかき撫でゝ。あらなつかしやと言はんとすれば。

地「横障の。雲の隔てか悲しやな。く。今まで見えし姫小松の。はかなや何処に。木隠笠ぞ津の国の。和田の笠松や箕面の。滝津波も我袖に。立つや卒都婆のそとは誰。蓑笠ぞ隔てなりけるや。松島や。小島の苦屋内ゆかし。私は卒土の浜千鳥。音に立てゝ。泣くより外の事ぞなき。

地クリ「往事渺茫としてすべて夢に似たり。旧遊零落して

半泉に帰す。

「とても渡世をいとなまば。士農工商の家にも生ま

れず。

地 「又は琴碁書画をたしなむ身ともならず。

シテ 「唯明けても暮れても殺生をいとなみ。

地 「遅々たる春の日も所作足らねば時を失ひ。秋の夜長し夜長けれども。漁火白うして眠る事なし。

シテ 「九夏の天も暑を忘れ。

地 「玄冬の朝も寒からず。

クセ 「鹿を逐ふ猟師は。山を見ずといふ事あり。身の苦しさも悲しさも。忘れ草の追鳥。高縄をさし引く汐の。末の松山風荒れて。袖に波こす沖の石。又は干渴とて。海ごしなりし里までも。千賀の塩竈身を焦がす。報いをも忘れける。事業をなし、悔しさよ。そもそも善知鳥。やすかたのとりぐに。品かはりたる殺生の。

シテ
「中に無慙やな此鳥の。」

地「愚かなるかな筑波嶺の。木々の梢にも羽を敷き。波の浮巣をもかけよかし。平砂に子を生みて落雁の。はかなや親は隠すとすれど。うとふと呼ばれて。子はやすかたと答へけり。さてぞ取られやすかた。」

シテ
「うとふ。」

地「親は空にて血の涙を。降らせば濡れじと菅簾や。」

笠を傾けこゝかしこの。便を求めて隠笠。隠簾にもあらざれば。猶降りかゝる血の涙に。目も紅に染み渡るは。紅葉の橋の鵠か。

地「娑婆にては。善知鳥やすかたと見えしも。く。」

冥途にしては怪鳥となり。罪人を追つ立て鉄の。

嘴を鳴らし羽をたゝき。銅の爪を磨ぎ立てゝは。

眼をつかんでしゝむらを。叫ばんとすれども猛火の煙に。むせんで声をあげ得ぬは。鴛鴦を殺し、

科やらん。遁げんとすれど立ち得ぬは。羽抜鳥の
報いか。

シテ
「うとふは却つて鷹となり。

地
「私は雉とぞなりたりける。遁れ交野の狩場の雪
吹に。空も恐ろし地を走る。犬鷹に責められて。
あら心うとふやすかた。安き隙なき身の苦しみを。
助けてたべや御僧。助けてたべや御僧と。いふか
と思へば失せにけり。